第107回 卒業式を挙行

日本歯科大学新聞

東京千代田区富士見
日本歯科大学新聞会
発行兼編集人　中原　泉
発行日　偶数月末日
定　価　1部10円
編集室　（〒951-8580）
新潟市中央区浜浦町1-8
☎025（267）1500

本学のシンボルマーク

両学部168名が巣立つ

卒業証書番号No.二一一七〇号に

日本歯科大学第一〇七回卒業式（学位記授与式）は、三月初旬両学部において挙行し、一六八名の学士（歯学）を送り出した。あわせて日本歯科大学大学院第五十五回修了式が催され、十五名に博士（歯学）の学位記が授与された。また、東京短期大学と新潟短期大学の卒業式も挙行された。

第55回大学院修了式を併催

生命歯学部

生命歯学部の部は三月七日（水）に生命歯学部富士見ホールにおいて大学院第五十五回修了式を併催して挙行された。

定刻午前十時、司会の高橋孝幸庶務部長が開式を宣した。まずクラス主任の添野雄一教授より、平成二十九年度卒業生一一七名の氏名が呼びあげられた。中山竣太郎君が代表して、中原泉学長より、栄えある卒業の証として学士（歯学）の学位記を授与された。

つづいて学術優秀賞二十名、六カ年皆勤賞十一名、精勤賞十一名、五カ年精勤賞三名、学術奨励賞十名、臨床実習優秀賞三名の受賞者に対して賞状等が授与された。

ついで大学院生命歯学研究科委員の都築民幸教授より、大学院生命歯学研究科博士課程修了生十二名の氏名が呼びあげられ、修了生一人ひとりに、研究の成果を証する博士（歯学）の学位記が授与された。

つぎに中原学長と、羽村章生命歯学部長、八重垣健大学院生命歯学研究科長が告辞（別掲）を述べた。

つづいて在学生を代表して、第五学年の宇佐見智里さんが先輩を送る送辞を述べ、卒業生を代表して中山竣太郎君、大学院修了生を代表して望月真衣さんが答辞を述べた。

終わりに祝電が披露され、全員で校歌を斉唱して、午前十一時三十分に閉式した。

中原泉学長から学位記を手渡される卒業生代表（3月7日・東京）

新潟生命歯学部

新潟生命歯学部の部は、三月九日（金）に新潟生命歯学部講堂において、大学院第五十五回修了式を併催して挙行された。

定刻午前十時三十分、司会の若槻紀寿事務部長が開式を宣した。まずクラス主任の佐藤聡教授により、平成二十九年度卒業生五十一名の氏名が呼びあげられた。下村里佳さんが代表して、中原学長より、栄えある学士（歯学）の学位記を授与された。

つづけて学術優秀賞十二名、皆勤賞四名、精勤賞五名、学術奨励賞七名、臨床実習優秀賞一名の受賞者に対して賞状等が授与された。

ついで大学院新潟生命歯学研究科長の新海航一教授より、新潟生命歯学研究科博士課程修了生三名の氏名が呼びあげられ、修了生一人ひとりに、研究の成果を証する博士（歯学）の学位記が授与され、渡會侑子さんに大学院研究発表優秀賞が贈られた。

つぎに中原学長と、藤井一維新潟生命歯学部長、新海航一大学院新潟生命歯学研究科長が告辞（別掲）を述べた。

つづいて在学生を代表して、第五学年の南祥之君が先輩を送る送辞を述べ、卒業生を代表して下村里佳さん、大学院修了生を代表して渡會侑子さんが答辞を述べた。

終わりに祝電が披露され、全員で校歌を斉唱して、午前十一時三十分に閉式した。

告辞を述べる中原泉学長（3月9日・新潟）

東京短期大学

東京短期大学の卒業式は、短大事務室の今井久枝事務長の司会により、三月六日午前十時、生命歯学部富士見ホールにおいて挙行された。

まず第四十五回歯科衛生学科卒業生七十三名と、第四十九回歯科技工学科卒業生四十四名の氏名が呼びあげられ、奈良陽一郎学長から栄えある卒業の証として、各学科の代表に短期大学士（歯科衛生学）と短期大学士（歯科技工学）の学位記が授与された。

ついで第四十七回専攻科歯科技工学専攻五名、第五回専攻科総合技工学専攻十五名と、第九回専攻科歯科衛生学専攻十一名、第五回専攻科口腔リハビリテーション学専攻五名に修了証が、また各賞の受賞者に表彰状が授与された。

そして専攻科歯科衛生学専攻修了生と、専攻科歯科技工学専攻修了生は独立行政法人大学改革支援・学位授与機構より、学士（口腔保健学）の学位を取得したことが報告された。

つぎに奈良学長が告辞（別掲）を述べた。

引き続き来賓の羽村章生命歯学部長は、「歯科衛生士、歯科技工士とも大きな転換期を迎えている。これからの歯科衛生士の仕事は歯科医院や地域だけでない。周術期の患者さんの口腔の健康を守ることが、手術の成功に導くことがはっきりわかってきた。またデジタルデンティストリーは、歯科技工の中で大きな変化を起している。歯科技工士の英語名はテクニシャンではなく、デンタルデザイナー、もしくはデンタルエンジニアがふさわしいかもしれない。データを駆使してデザインをして技工物をつくる。今までと全く違った手法を学び身につけていくことになるので、新しい歯科を切り開いていただくことを期待している」と祝辞を述べた。

三代冬彦附属病院長は、「これからが本当の勉強になるわけだから、日々研鑽を積んで患者さんのために自分の仕事に誇りをもってやっていただきたい。自分の取得した資格を生かして、今後は後輩を育てていく、という気持ちを持ってほしい」と祝辞を述べた。

学長告辞に聞き入る卒業生たち（東京）

新潟短期大学

新潟短期大学の卒業式は、若槻紀寿新潟生命歯学部事務部長の司会で、三月八日午前十時三十分より、新潟生命歯学部講堂で挙行された。

まず第三十三回歯科衛生学科卒業生三十六名に、佐野公人学長から栄えある卒業の証として、一人ひとりに短期大学士（歯科衛生学）の学位記が授与され、各賞の受賞者に表彰状が授与された。

つぎに公益社団法人日本歯科衛生士会会長表彰の表彰状が、新潟県歯科衛生士会の三富純子会長（新潟短大准教授）から手渡された。

ついで、第十九回専攻科歯科衛生学専攻修了生五名と、第一回専攻科在宅歯科医療学専攻修了生一名に修了証書が授与されたのち、独立行政法人大学改革支援・学位授与機構より授与された学士（口腔保健学）の学位記が佐野学長より歯科衛生学専攻修了生に手渡された。

つぎに佐野学長が告辞（別掲）を述べた。

引き続き来賓の藤井一維新潟生命歯学部長は、「先月平成三十年度の保険診療の点数改定と介護保険の改定の二つが発表された。四月からは訪問診療に歯科衛生士が同行することで点数化される。PMTCも歯周病に特化されていたが、歯科疾患全般に広がった。そして衛生士実地指導の内容についても追加された。

何故歯科衛生士が注目を浴びるかというと、日本経済の救世主、つまり口の中をきれいにすれば緊迫する医療費を軽減することができるからだ。歯科衛生士は結婚や育児などで離職率が高いといわれるが、職を離れることなく、生涯続けることができる職業に変わってきた。この流れに乗り、みなさんは生涯、歯科衛生士であるように祈念する」と祝辞を述べた。

卒業生代表に学位記が授与された（新潟）

中原泉学長卒業告辞

中原泉学長：歯科医療は歯口腔にとどまらず、全身状態の改善、全身病の予防と回復をはかる医療の一環であり、本来、身体に境界線はない

◆新たな医療の在り方

もう半世紀も前になるが、私の学生時代、歯性病巣感染という用語が使われていた。これは「歯性の限局性の慢性化膿性病巣を有する患者において、この原病巣から直接連絡のない遠隔の臓器に、器質的な組織変化あるいは機能的障害を呈するもの」と定義されていた。けれども、どういう疾患があるかについては曖昧で、原病巣から産生される毒素、アレルゲン、細菌等が血行やリンパ行によって引き起されるというに止まり、具体的な疾患名は挙げられなかったように記憶する。

現在では、歯性病巣感染は原病巣は慢性根尖性歯周炎、辺縁性歯周炎などで、二次感染は、骨・関節・筋肉の疾患としてリウマチ熱、関節リウマチ、循環系の障害として心筋炎、心内膜炎、腎臓の障害として腎炎、その他にアレルギー、全身性エリテマトージス、虹彩毛様体炎等が挙げられている。歯科医師国家試験では、この歯性病巣感染、菌血症、敗血症、全身性炎症性反応症候群（ＳＩＲＳ）をふくめて歯性全身性感染症とよんでいる。

一方、昨年（二〇一七）四月に、厚生労働省の「新たな医療の在り方を踏まえた医師・看護師等の働き方ビジョン検会」は報告書をまとめ、時代に即応した働き方を確保する指針を示した。その具体的なアクションの一つとして、医科歯科の連携と歯科疾患予防の推進をあげた。

具体的には、1)周術期に口腔管理を行うことで入院日数が減少する、2)口腔ケアが誤嚥性肺炎の発症予防になる、3)歯周病患者に糖尿病の発症リスクが高い等、口腔が全身疾患とふかい関連性を有すると認めた。これらは歯科ではなく医科の検討会の提言であることに意義があり、近年、口腔の重要性が各方面から注目されていることを証明している。

すでに、歯周病、歯の欠損、噛む力と食べる力の低下、舌の力の低下、口腔管理の欠如等が、動脈硬化、高血圧、糖尿病、心筋梗塞、脳梗塞、低栄養、誤嚥性肺炎等の全身病に関連するというエビデンスが明らかにされた。

◆口腔と全身病

近年、とくにこの六、七年の間に、口腔と全身病との関連性について、次々に新しい事実が解明されている。それは、もはや過去の歯性病巣感染や歯性全身性感染症という枠組みでは、捉えきれないほど広範多岐におよんでいる。私の知りえただけでも、次のような新知見がみられる。

認知症に関しては、二〇一〇年に高齢者の残存歯数と認知機能との相関について、保有歯数が多いほど認知症になりにくく、そのリスクが低くなることが立証された。噛むことによる刺激が、歯根膜というセンサーを通して脳中枢に伝達され、認知機能を保持するという。また、二〇一三年にはアルツハイマー型患者の脳から、ポルフィロモス・ジンジバリス（Ｐｇ菌）が検出され、この歯周病菌が認知機能を低下させるリスクの高いことが立証された。

また、歯周病菌に関しては、従来、歯周病菌や歯周病で生じた物質が、患部から血流にのって全身をめぐり、さまざまな臓器で炎症を誘発するというのが定説であったが、それだけではなく、唾液とともに飲みこんだ歯周病菌が腸内細菌のバランスを変え、全身の疾患に悪影響を与えることが二〇一四年に報告された。さらに二〇一七年には、歯周病菌が関節リウマチの炎症を悪化させるメカニズムの一端が明らかにされ、歯周病原因菌のジンジバリスのだす歯周組織破壊酵素ジンジパインが、アルツハイマー病の悪化につながる因子であるとされた。

そのほか二〇一六年には、次のような様々な研究成果が発表されている。

・過去二年以内に歯を失うと、原発開放隅角緑内障（ＰＯＡＧ）の発症リスクが高まる。とくに二年以内の喪失が歯周病と重なると、ＰＯＡＧのリスクがさらに高まる。

・サルコペニアは、高齢者の全身の筋力が減少する病気で、転倒などにより骨折しやすく、同病には舌の筋力低下がふかく関連している。

・喪失歯数と動脈硬化の程度には明らかな相関があり、喪失歯数が多いと動脈硬化のリスクが高まる。

・成人男子の身長と歯の本数に関し、身長が低いほど保有歯の数が少なく、喪失歯の増加は低身長のリスクを高める。

・劣悪な口腔衛生環境は、高齢者の低栄養を招く要因であり、低栄養により重篤な疾患に罹るリスクが高まる。

加えて、本年早々には、アメリカ人約七千人を十五年間追跡した大規模観察研究で、歯周病が虚血性脳卒中、とくに心原性脳塞栓と血栓性脳梗塞の発症リスクに関連すると報告した。「歯周病は虚血性脳卒中の独立したリスク因子」であるとし、歯周病の進行により脳卒中リスクも上昇すると示唆した。あわせて、定期的歯科診療により脳卒中のリスクが二十三％減少するとし、虚血性脳卒中の発症予防に定期的な歯科受診が有用であると強調した。

こうした世界的潮流をうけて、国際歯科連盟（ＦＤＩ）は本年二月、グローバル歯周健康プロジェクトの白書とツールキットを発表した。世界の成人人口九十％が歯周病に罹患しているとし、歯周病の予防と管理が、口腔保健にとどまらず全身の健康と深く関与していると、国際的な歯周病対策を強調した。

◆全身病の予防と回復

以上の通り、歯科医療は歯口腔にとどまらず、全身状態の改善、全身病の予防と回復をはかる医療の一環として位置づけられ、歯科サイドの役割と重要性が周知されてきている。本来、身体に境界線（Grenzgebiet）はないことを再認識する。

結局、私の言いたいことは、在学中学んだことが、一生通用する訳ではないということである。歯科医学・歯科医療は、刻々と進展していく。半世紀前に私が卒業した時と現在では、天と地の差があると言って言いすぎではない。十年、十五年経てば、歯科医療は様変わりしていく。古来、生き物は強い者が生き残るのではなく、変化に対応する者が生き残るのだと言われる。諸君は、今後の自分の学問の変化に対応していくことを忘れてはならない。

本日は、今、歯科界に渦巻く新しい潮流について話した。おわりに、日本歯科大学第一〇七回卒という永久背番号をつけて、社会の荒波に乗りだしていく卒業生諸君の健闘を祈る。

（３月７日・３月９日）

歯学部長告辞

生命歯学部長　羽村　章

みなさんは本学での生活を通じ、歯科医学以外にも多くのことを学んだと思う。臨床実習で実際に患者さんの治療にあたり、頭で描いていた治療が実際には思い通りにいかなかったこと、共用試験や歯科医師国家試験ではどれだけ知識があろうとも平常心を保たなければ普段の実力は出せなかったこと、これらはよい経験であったと思う。

「医師にとって沈着な姿勢に勝る資質はない」とは、現代医学教育の基礎を築いたウィリアム・オスラー博士が一八八九年五月一日にペンシルベニア大学を去るとき、卒業式で述べた言葉である。沈着な姿勢とは、状況の如何に拘らず、冷静さと心の落ち着きを失わないことを意味している。優柔不断でいつもクヨクヨし、それを表面に出す医師、日常生じる緊急事態に狼狽し取り乱す医師、こういう医師はたちどころに患者の信頼を失うとも述べている。沈着な姿勢は実践と経験を重ねることによって多くは身に付くがそれを真に完璧にするためには幅広い経験と病気の諸症状について詳しい知識が必要であり、「知識を備え経験を積んだ医師は何事が起ろうとも心の平静さを乱されることはない」と続けている。心の平静さは、全ての事柄について成功のための条件である。

西郷隆盛は「急速は事を破り、冷静は事を為す」すなわち焦って物事と取り組むと失敗し、沈着冷静に取り組むことで物事は成功すると述べている。徳川将軍家の兵法指南役の柳生宗矩は、「平常心をもって一切を為す人、これを名人というなり」と記している。常に平常心をもって歯科医療に取り組む歯科医師になれといっているように聞こえる。

イギリスの作家ジェームズ・アレンは、「人々は常に冷静で穏やかに振る舞う人物とのかかわりを好むものである」と述べている。患者さんは冷静で穏やかな歯科医師の治療を望んでいると私は読み取っている。みなさんは歯科医師として、職業人として、社会人として勉強を続け、多くの人を助けていただきたい。

一〇七回生が歯科医師としてひろく社会に貢献し、自身だけでなく母校である日本歯科大学の名声を高めることを祈念して、生命歯学部長の告辞とする。

（３月７日）

新潟生命歯学部長　藤井一維

昨年末、厚生労働省医政局が実施している「歯科医師の資質向上等に関する検討会」が中間報告として歯科医師医療保健ビジョンを出した。この報告ではそのビジョンの必要性についてこれまで歯科医療機関および歯科専門職種で完結していた歯科保健医療は地域包括ケアシステムの構築の観点から現在の外来診療を中心とした提供体系に加えて入院患者や居宅療養者への診療も含めた提供体制を構築する必要があり、その際は他職種や他分野との連携が必要で、歯科診療所は今後の患者のニーズの変化に対応するために、外来診療に加えて病院や在宅等における訪問診療を行うことが求められる。

さらに診療形態や人員等の課題から訪問診療の提供が困難な場合には、診療所は外来診療と訪問診療の役割分担をし、外来診療時間の調整による訪問歯科診療の実施の確保、それから訪問診療を実施している他の歯科医療機関との連携をはかることが考えられる、という報告内容になっている。これは当然のことながら本学の訪問歯科口腔ケア科がすでに三十年来から実施していることなので、この必要なビジョンはすでに諸君に提示され、かつ体験してきたことになる。

この中で私はあえて言いたいことは、訪問歯科診療とは学問ではなくて診療形態であるということだ。本学が新たに三条市に開設する地域包括ケアシステムに照準を合わせた日本歯科大学在宅ケア新潟クリニックは、ユニットのない診療所で、ここはこれからの歯科医師の診療形態の提案の場である。

訪問診療は当然、補綴、保存、口腔外科など歯学が結集された医療で、必要な知識、技能は外来と同じである。むしろその技能は外来よりも高いレベルが要求される。更に必要なことは医療人としてある前に、人としての人間性や人生経験が反映された態度である。したがって、まずは外来においてこれに対応できるように研鑽をする必要がある。

プロフェッションである歯科医師は、生涯学びつづける義務がある。諸君が日本歯科大学第一〇七回卒業生となれたことは、日々の努力のあかしだと思う。これからの君たちの目標は、百点満点の歯科医療の提供であるということを最後に提示して、新潟生命歯学部長の告辞とする。

（３月９日）

大学院研究科長 告辞

生命歯学研究科長
八重垣 健

みなさんの多くは締切ぎりぎりまで、論文の書き直しに苦労してきた。そして学位審査を受けると審査委員から質問攻め、そしてまたもや論文訂正、合格するのは尋常でなかったと思う。

そこでご父兄に本研究科の学位申請システムをご説明したい。申請までに大学院生は、その論文出版を学術誌に許可してもらわないといけない。学術誌は国際学術誌、中でも学術誌のレベルを示すインパクトファクター（IF）という国際的な評価点がついた権威ある学術誌が望まれる。昨年二〇一六年度の学位論文は九割以上が英語論文だった。しかし、インパクトファクターが付いた論文は七割、それほど難しい。

昨年の卒業式では、将来は論文の質を上げないといけないと述べたが、今年度の学位論文は十二本あり、そのうち十一本なんと九割以上にインパクトファクターが付いている。中にはインパクトファクターが4を超える論文があった。わずか一年で論文の質が急に向上した。これは大学院生の努力、そして教授方の指導能力の高さを示している。みなさんは、いま何物にも代えがたい博士号を手に入れ、達成感を味わっているはずだ。困難を乗り越えたみなさんは自信をもって胸をはり、私は日本歯科大学博士であると公言していただきたい。それだけ価値のある大学院を修了したのである。

君たちが世界の日本歯科大学を昨年より更に高いところに持ち上げた。特に今日の生命歯学部卒業生が研修医をおわる来年、再来年には、たくさん大学院に入学していることを期待している。

（3月7日）

東京 新潟 短期大学 学長告辞

東京短期大学学長
奈良 陽一郎

昨日まで私たちは教える側、みなさんは学ぶ側と立場が違ったが、今日これ以降は全世界の歯の病いをもった患者さんに寄り添い、支えることに喜びを見出し、そして多くの人々の健康と幸せを支えていく医療人として同じ立場となった。

歯科衛生学科卒業生、専攻科修了生は、どのように患者さんに接し、どういう形で自分たちのもっているスキルを基に、健康で豊かなそして幸せな日々を送っていただくか…について学んできたと思う。特に生身の人間と身近に接し、歯科医師さらには多職種医療連携チーム医療のパートナーである医科系の先生方、多くのコ・メディカル・スタッフと力を合せて患者さんの病いに向いあい、その大切さ難しさを経験したと思う。またそれら体験の中から歯科衛生士としての喜びを感じる機会を得たのではないかと思う。

一方、歯科技工学科卒業生、専攻科修了生は、レジン、セラミックや金属をはじめ新しい素材を如何に患者さんのお口の中で違和感なく、心地よく、思わず笑みがあふれてしまうような技工物として使っていただくことができるか…について学んできたと思う。また丹精込めた技工物提供の先には、幸せな健康寿命の延伸があるという素晴らしい意義を発見したのではないかと思う。

どちらかというと歯科衛生学科はヒトと、歯科技工学科は材料と取り組むことになるが、いずれも患者さんの期待を担っていることに違いはない。あるときは患者さんの喜びを、またあるときは憤りを私たち医療人は受け止めることになる。学科は異なれ、私たちの対象は感情豊かな人間、生身のヒトであるということをこれからの仕事の中で思い起こし、思い遣りある医療人として歩んでもらいたい。国民・患者に寄り添い期待に応える医療人として羽ばたいてゆく諸君をこれからも応援したい。

（3月6日）

「今日からは医療人として同じ立場」と語る奈良学長

答辞を述べる卒業生代表（東京短期大学）

新潟生命歯学研究科長
新海 航一

文部科学省直轄の国立試験研究機関である科学技術・学術政策研究所が、web公開している「科学技術指標2017」の報告では、二〇一三年度の主要国における博士号取得者数を人口百万人あたりでみた場合、最も多い国はドイツで三四四人、ついでイギリスで三三一人、日本は一二一人でドイツやイギリスよりずっと少なく、主要国で第六位とのことだ。

また日本の博士号取得者は継続して増加していたが、二〇〇六年度をピークに減少に転じていると報告されている。一方博士号取得者の数は日本以外の主要国で全て増加しており、アメリカ、イギリス、そして韓国で大きく伸びているようだ。

博士号取得者の減少は論文数の減少にもつながり、注目度の高い論文数は現在世界第九位でその順位は年々低下している。日本はアメリカにつぐ世界第二位の論文数を誇り、高い科学技術力を誇示していたが、現状は世界に後れをとりつつある。もう一度その輝きを取り戻すためには、諸君のようなモチベーションが高い若者が必要だと思っている。これからは、研究生活で培った実力を今後の研究や医療に発揮していただきたい。

諸君の学位論文は全てIF付きの英文誌に投稿されている。投稿論文がアクセプトまで至っているのが理想的だが、IF付きの英文誌ではレビュー期間が長いという現状を鑑み、本研究科ではIF付きの英文誌への投稿までを義務付け、アクセプトまでは未だ義務化していない。それはできるだけIFの高い英文誌への掲載を期待しているからである。しかし一年以内にアクセプトされることが学位記授与の条件だから、学位論文がしっかりとIF付きの英文誌に掲載されるまでフォローすることが諸君の義務であると強調しておきたい。

（3月9日）

▶▶▶▶ 2018 卒業式点景 ◀◀◀◀

写真上・生命歯学部（3月7日）　写真中・新潟生命歯学部（3月9日）
写真下・左／東京短期大学（3月6日）　右／新潟短期大学（3月8日）

新潟短期大学学長
佐野 公人

みなさんはこれから社会に出て歯科衛生士として歩みはじめるわけだが、門出に二三の助言をしたい。一つ目は知識についてで、三年間、新潟短期大学あるいは新潟病院における歯科臨床で学んだ多くの事項は最新の歯科医療に基づくもので、今後の歯科衛生士業務の基礎となるものだ。しかし医療の分野でも新しい治療法や新薬の開発など技術の革新は今現在めざましいスピードで進歩していく。みなさんは最新の医学情報を入手すべく常にアンテナを外に開き、講習会や講演会などにも積極的に参加する姿勢を持ち続けていただきたい。

二つ目は人間関係についてで、歯科衛生士の業務は大半は歯科医院におけるものである。そこでは患者さんを中心に歯科医師、歯科衛生士、歯科技工士、歯科助手などのチームが主な構成要員だが、在宅歯科診療などで一歩外に出ると、医師、訪問看護師、薬剤師、理学療法士、ケアマネジャーなどの他職種との連携を保たなくてはならない。当然そこでの会話や会議の中で使われる言葉は専門用語が大半で、これらの理解なしでは会話は成り立たず連携医療に支障が出て、結局は患者さんに不利益が生じる。医療の中で和を以て接する態度も重要だが、他職種についての知識、理解と協調も必須の事項と心得て実践してほしい。

最後に私は医療の基本は手当てだと思う。患者さんの痛い所に真心をもって手を当てる、困っていることに手を差し伸べる、どうか病める患者の痛みを感じ、癒すことのできる心ある歯科衛生士をめざして頑張っていただきたい。

（3月8日）

佐野学長から卒業生一人ひとりに学位記が手渡された

卒業生代表による答辞（新潟短期大学）

平成二十九年度卒業生

大学院

第55回修了生

大学院生命歯学研究科修了生十二名、新潟生命歯学研究科修了生三名は次の通り。

〈生命歯学研究科〉

歯科矯正学　生駒美沙
歯科麻酔学　辻本源太郎
歯科保存学　吉田和貴
臨床口腔機能学　光岡一行
発生・再生医科学　望月真衣
歯科保存学　関谷美貴
歯科補綴学Ⅰ　山本早織
接着歯科学　村田卓也
歯科補綴学Ⅰ　田中優香
歯科補綴学Ⅱ　新妻瑛紀
薬理学　松井美紀子
歯科矯正学　川嶋優花

〈新潟生命歯学研究科〉

機能性咬合治療学　篠原隆介
口腔全身機能管理学　齋藤芳秀
機能性咬合治療学　渡會侑子

大学

第107回卒業生

日本歯科大学第一〇七回卒業生〈生命歯学部〉一一七名は次の通り。

秋元　竣　淺田奈緒美
有川風雅　井澤聡介
石川怜奈　石田　拓
市川友紀子　伊藤裕理
井上真帆　飯領田采奈
上野弘祥　上野桃子
馬詰雅比古　江藤仁香
大迫里江　大島貴之
大橋未来　大村友希江
岡田友理　小島真紀子
角田尚大　片田治子
勝海怜一　勝沼昌太郎
金谷悠太　河越麻衣
川瀬　剛　川田幸平
川田崇広　寒竹容子
国吉寛仁　黒山かれん
小番　爽　後藤達哉
小森雅之　齋藤敦史
齊藤香穂　齊藤仁志
酒井美結　坂部茉奈
佐々木麻吏子　下埜真梨恵
下村一徳　菅あや奈
鈴木絵里加　鈴木健人
鈴木優花　鈴村一慶
高瀬敦基　髙梨真佑
財部香七　忠重勇輝
田中利沙　角掛　愛
遠山皓基　戸倉絢菜
内記瑠美　中澤美和
中澤遼太　中田智大
永野史高　中村かりん
中山竣太郎　生川太門
能智崇徳　長谷川徹
畑　賢佑　原あきら
武川幸太郎　藤田真澄
藤野愛子　古澤誉彰
星　優生　堀　夏菜子
巻　祐太　松井誠貴
松浦春香　松田直樹
松原夏美　丸恵莉香
三井田洋邦　三木　惠
水沼詩葉　宮坂彩子
宮原佑季　望月　茜
後藤達哉　山井康暉
齋藤敦史　山口あゆみ
齊藤仁志　山本陸矢
山上　彩　山田賢典
山田賢典　横田有希
横田有希　吉川峻矢
吉川峻矢　吉田和真
吉田和真　上野泰路
高田恵美　遠藤靖子
楳津　舞　加藤千佳
大倉康平　久保雅志
久住芳樹　渋谷菜々美
佐能　彰　竹内亜世子
杉﨑拓也　新沼拓海
田中崇之　福江武洋
原口　周　南　亮佑
窪内隆博　小川翔子
島田星羅　山田憲司

（第二一一一九号まで）

☆学術優秀賞受賞者

中山竣太郎　水沼詩葉
遠山皓基　大村友希江
山上　彩　中澤美和
酒井美結　菅あや奈
角掛　愛　淺田奈緒美
川瀬　剛　井上真帆
黒山かれん　松浦春香
横山美世子　中澤遼太
大橋未来　大迫里江
古澤誉彰　齊藤仁志

☆六ヵ年皆勤賞受賞者

淺田奈緒美　井澤聡介
飯領田采奈　川田幸平
齋藤敦史　下埜真梨恵
忠重勇輝　田中利沙
戸倉絢菜　三木　惠
吉川峻矢

☆六ヵ年精勤賞受賞者

大村友希江　金谷悠太
黒山かれん　鈴木絵里加
中村かりん　中山竣太郎
藤田真澄　星　優生
巻　祐太　望月　茜
横山美世子

☆五ヵ年精勤賞受賞者

角掛　愛　松浦春香
山上　彩

☆臨床実習優秀賞受賞者

淺田奈緒美　大橋未来
巻　祐太

日本歯科大学第一〇七回卒業生〈新潟生命歯学部〉五十一名は次の通り。

伊藤　悠　宇留間　紫
大川悠里　大竹汐里
大村里沙　金井由仁
上津豪洋　木村奈々
後藤弘一　小林彩利
椎木　甫　志田佳那
下村里佳　関　姫乃
谷本水輝　土屋遊生
土屋健太郎　角田　望
外島寛朗　豊嶋啓汰
西原未城　平井　悟
平形友里香　普川公貴
前川朝凪　丸尾瞳子
三澤寛晃　宮野侑子
向井亮平　横井康乃
吉田早織　渡部圭将
渡部晃士　鈴木亮太朗
浅田英紀　川田恭平
岩渕礼佳　小出　岳
小林勇輝　佐久間誠也
清水大規　多田早織
寺尾育美　八子　研
和田　剛　佐藤春香
島志津佳　米田幸平
小松周平　藤田大介
菊池達也

（第二一一七〇号まで）

☆学術優秀賞受賞者

下村里佳　小林彩利
向井亮平　豊嶋啓汰
土屋健太郎　大竹汐里
横井康乃　大村里沙
大川悠里　丸尾瞳子
角田　望　西原未城

☆皆勤賞受賞者

大竹汐里　関　姫乃
西原未城　平形友里香

☆精勤賞受賞者

宇留間　紫　大村里沙
金井由仁　後藤弘一
小林彩利　小林彩利

☆病院（臨床）実習優秀賞受賞者

小林彩利

学術奨励生

平成二十九年度日本歯科大学学術奨励生（一一七名）は、次の通り。

〈生命歯学部〉

一年＝橋本祐樹　小杉麻衣　武田僚太　平田貴哉　茂木雄嗣
二年＝宮田大輝　荒川優子　小谷比登美　佐藤奈未　寺門博史
三年＝渡辺尚子　大沼瑞穂　須田隆正　名取健太郎　原田芽衣
四年＝杉山怜央　五十嵐晃　田端　輝　椿田一馬　南ひかる
五年＝別府大嘉繁　江畑結利花　黒川理佐子　青木優衣　斉藤敦也　仲谷　光　前島芽依　柳澤芽依　合場奈美　神谷真帆　小林英里沙　進藤燿子　中山智博　岩渕柚香　鈴木健太朗　中村莉子　羽毛田真佑花　山本佳央莉　阿部　凱　田代茂太　田村亮祐　古田賢太朗　山田太陽　赤羽由紀子　勝浦杏奈　齊藤美都子　酒寄智央　埴　太宥　大村友希江　遠山皓基　酒井美結　角掛　愛　中山竣太郎　中嶋脩哉　鈴木義人　石井晴華　田　愛　円谷祐太朗　川名葉子　池澤叡輔　長嶺和花　水沼詩葉　中澤美和　菅あや奈　川瀬　剛　淺田奈緒美　松本沙織　西巻和広　三尾久典

〈新潟生命歯学部〉

一年＝吉田　愛　石井晴華　鈴木義人　中嶋脩哉　長嶺和花　三尾久典　茂木美沙希　飯島才絵　大嶺永貴　竹内千紘　永田琴乃　竹本瑞季　手塚保仁　浜島美咲　百瀬千裕　福田　悠　姜　裕奈　田中章太郎　青木映璃　稲辺勝登　鈴木もえ　田中雄祐　八藤後堯　髙橋健太郎　辻村大河　中野葉月　伴　圭介　吉田織恵　大野　寛　田代夏乃　常木洋平　梨本　尚　町田東子　梁　由美　畔元研太郎　篠崎未有　野口裕太　平林大樹　小林彩利　土屋健太郎　西原未城　花田大地　米山実来　穐保由衣　大竹　萌　西澤義樹　塙　荘太郎　南　祥之　大川悠里　下村里佳　角田　望

最終記念講義

代居教授（東京放射線）　宮川教授（新潟理工）

最終記念講義を終えて（写真上・代居教授、下・宮川教授）

代居敬教授の最終記念講義は、三月十五日午後六時から九段ホールで開催された。演題は「学際領域に魅かれて」で、多数の教職員、学生、大学院生、関係者が聴講し、講義のあと中原泉学長から記念品が手渡された。

代居教授は、昭和四十八年三月電気通信大学卒業。五十四年三月本学卒業（第六十八回卒）、五十八年三月大学院歯学研究科修了。同年四月本学歯学部歯科放射線学教室助手、講師、助教授を経て、平成七年四月教授に就任。二十三年間にわたり歯科放射線学講座を主宰した。

＊＊＊

宮川行男教授の最終記念講義は、三月二十二日午後六時十五分からアイヴィホールで開催された。

演題は「本学における教員生活40年間の最後に伝えたいこと」で、多数の教職員、学生、大学院生、関係者が聴講し、講義のあと中原学長から記念品が手渡された。

宮川行男教授

宮川教授は、昭和四十九年三月本学卒業（第六十三回卒）、五十三年三月大学院歯学研究科修了。同年四月本学新潟歯学部歯科理工学教室助手、講師、助教授を経て、平成十一年四月先端研究センター（生体材料学）教授、二十五年四月歯科理工学講座教授に就任。教務部長、大学院新潟生命歯学研究科長、歯学会会長等を歴任した。

平成30年度歯学会大会のご案内

日時：平成30年６月２日（土）11：00～16：30（予定）
会場：日本歯科大学生命歯学部　富士見ホール・展示室

●メインテーマ『デジタル歯科の最前線』

平成24年（2012）にＣＡＤ/ＣＡＭにより作製されたハイブリッドレジン冠が健康保険に導入され、デジタル歯科の臨床応用への道筋が明らかとなりつつある。現在の補綴物作製に用いられるＣＡＤ/ＣＡＭシステムは、石膏模型のデジタルスキャンから始まり、ハイブリッドレジンでは、最終補綴物の切削加工が行われるが、この他に、セラミックスブロックやワックスの切削加工による鋳造用パターンの作製なども既に臨床応用されている。最新の話題としては、口腔内スキャナーや３Ｄプリンターの歯科応用があげられる。

そこで今回の歯学会大会では、各社の製品がほぼ出そろった感のある口腔内スキャナーについて、現状と問題点を明らかにし、さらに歯科応用の途上にある３Ｄプリンターによる積層造形法の現状を知ることにより、デジタル歯科の未来を予測することを目的として企画を立案した。

●基調講演：

「歯科用ＣＡＤ/ＣＡＭの現状」
高橋　英和　先生
（東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科医歯理工学専攻口腔機材開発工学教授）

●シンポジウム

「デジタル歯科の最前線－口腔内スキャナーの現状と課題－」
堀田　康弘　先生（昭和大学歯学部歯科理工学講座准教授）

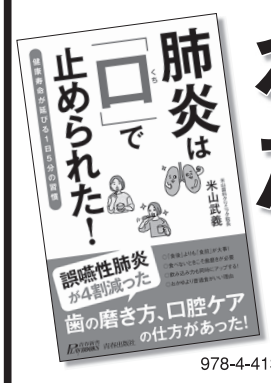
「切削加工法による現状と課題」
白鳥　沙久良　先生（生命歯学部歯科補綴学第２講座助教）

「歯科医療における３Ｄプリンターの発展」
石田　祥己　先生（生命歯科学助教）

●学術研究奨励賞受賞講演

●研究・症例発表：ポスター展示

大会長：宮坂　平（生命歯学部歯科理工学講座教授）
問合先：準備委員長：青木　春美（生命歯学部歯科理工学講座准教授）
TEL　03-3261-8697　haruaoki@tky.ndu.ac.jp

誤嚥性肺炎が4割減った
歯の磨き方、口腔ケアの仕方があった！
肺炎は「口（くち）」で止められた！
健康寿命が延びる1日5分の習慣
歯学博士・医学博士　米山歯科クリニック院長　米山武義 著
新書判　1000円＋税
青春新書 PLAYBOOKS


978-4-413-21101-7
青春出版社　〒162-0056東京都新宿区若松町12-1　☎03(3203)5121　FAX03(3207)0982